

平成28年度 発達障害の可能性のある児童生徒等に対する早期・継続支援事業
(発達障害早期支援研究事業)
成果報告書 (概要版)

実施機関名 (学校法人 光華女子学園)

1. テーマ

発達障害の可能性のある生徒が達成感・自己肯定感を高める授業法の研究と、合理的配慮の実践で、学校生活への不適応を未然に防止する

2. 問題意識・提案背景

発達障害の可能性のある生徒に対して、SCや支援員との連携で個別のケース会議を開き、支援の方向性を確認することを大切に組織的な取組をすすめてきた。「放課後学び教室」では、いろいろな教具や本を活用し本人の困っている所を探り授業に参加できる環境整備に努めた。しかし、教室に入りにくい生徒や登校しにくい生徒の中で、グループ学習が苦手だという理由が出てきた。近年ペア学習やグループ学習等アクティブラーニング型授業の実施が必要不可欠な時代である。アクティブラーニングの理解が不十分な教員が、授業を進めて行く中で、生徒の不安が高まり、教室での居心地が悪くなり、不適応をおこすのではないかと不安をもった。そこで今までの研究をベースに授業の中で、達成感や自己肯定感を高める工夫をすることで、学校不適応の未然防止につなげたいと考え、テーマを設定した。

3. 目的・目標

- ・「気づきのシート」の活用で、発達障害の可能性のある生徒の共通理解を行い、支援の要望や方法また主治医との連携がしやすいように全教職員で確認をする。
- ・それらの生徒が、学校生活に達成感を持ち、自己肯定感を高める取組を行うことで意欲的に登校できるように安心な学校環境をつくる。
- ・専門医や他機関との連携で、ソーシャルスキルを身につけると共に、合理的配慮の実践を進めていく。
- ・アクティブラーニング型授業や対話型授業等の中で、指導法の研究を行い、安心して授業に参加し、集団の中で力を付けられるようにする。
- ・「放課後まなび教室」や「気づきサロン」の開催で、授業に不安無く参加できるように、個別の支援で力をつける。

4. 主な成果

- ・学校組織として、生徒の状況を共通理解し、医療機関や関係諸機関との連携を行い、個別の支援につなげることができた。
- ・教員が各授業において、支援が必要な生徒の状況を意識できるようになっ

た。

・「放課後まなび教室」「気づきサロン」の開催で、生徒の自己理解と個別の支援を行い、少し自信を持たせられた。

・運営協議会の全体会に加えて、個々の支援状況や外部機関との連携において、京都市教育委員会からのアドバイスや大学の先生方の専門分野において紹介等協力していただき連携もしやすくなった。

・対話型授業の研究を年間計画の中で実施し、コミュニケーションの型を学習することで安心して授業に参加できた。

5. 指定校における取組概要

① 学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒の明確化

年度当初に各学級担任と保健室また支援員からの情報で、困難を示す生徒の一覧をあげた。学校独自で制作した「気づきのシート」と照らし合わせ、生徒の困り感の番号と関係機関、主治医、担任、本人の思いを一覧にまとめる。それにより、教室での支援や「放課後学び教室」での支援等方法を確認しながら実施した。

② 学習面（「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」）で困難を示す児童生徒に対する指導方法の改善・工夫

学校全体でユニバーサルデザインを意識した授業を行うことを徹底して行った。

「学習の目標」「本日の授業の流れ」の明記。黒板回りの整理や電子黒板や書画カメラを全教室に配置し有効活用している。公開授業の指導案にも必ずユニバーサルデザインの視点をいれ、授業の中では、ほぼ定着した。

教員研修において、「言語技術」の研修で、段階をおって物事をみたり考えたり、生徒にもわかりやすく指導する方法を学んだ。また対話型授業において「見る」「考える」「話す」「聴く」を繰り返し、コミュニケーションがスムーズにできるように細かなステップにおいて自信を持たせる。また答えは一つではないということや、カードや絵や物体を用いて、自分の考えを直接言わなくても、物で代弁させる場の設定をすることで、安心感を持たせたり、成功体験を積み重ねる工夫を行った。また人の考えを聞くことで自分の中に新たな考えが入ってくることを学ばせた。まだ不十分だが、今後継続した研究により、学校不適應を未然に防げるのではないかと考える。

個別の支援については、生徒から「困り感」を引き出し、支援員と教科担任により、生徒の状況を確認し、本人が納得して「放課後学び教室」に参加するように方向づける。また実技教科（家庭科等）は授業に入り込み支援を行う。

* 「数字」「計算」「図形」等に困難を示す生徒に対しての支援（例）

・タブレットを使用した四則計算トレーニング

・授業内容の学習を確認し、ワークや宿題を使用し学習をする。適宜躓きに合わせたプリントを準備し、問題の基礎と成る部分を学習する。

苦手な部分の学習をすると共に、本人の得意分野の学習も入れることで自己肯定感を高める指導を行う。

・遊びながら学ぶトレーニング

ラッツシュアワー（洞察力、記憶力、考える習慣等を鍛える）

立体パズル（イメージ力、思考力、図形認識力等を鍛える）

熟語トランプ（記憶力、思考力を鍛える）

記憶カード（記憶力、注意力を鍛える）

おはなしづくりカード（文章力、状況判断力を鍛える）

「点つなぎシート」を繰り返し活用し、空間認知力を上げる

* 「読む力」の育成支援

・ものさしや手づくりカードで、読む行が交錯しないように、読む行が見えるようにして読む練習を行う。（教室でのテスト時でも使用させる）

・本と耳からと両方からインプットさせることで、効果を上げる。

支援員には、家庭科（ゆかた制作）や理科の実験、また教室に入りにくい生徒への別室での支援、放課後学び教室での個別支援等、担任・教科担任との連携で行った。

③行動面（「不注意」「多動性－衝動性」）で困難を示す児童生徒に対する指導方法の改善・工夫

学校全体として「こころの教育」（授業や行事前の黙想や講堂礼拝）「礼儀マナー教育」や「伝統文化教育」等を通して、動作の形を身につける場面が多くあり、行動面でのソーシャルスキルを身につける場面となっている。

教室の中で気になる生徒については、別室で話し方、落ち着き方などソーシャルスキルトレーニングを行う。特に「気づきサロン」を設けて、予約無しで自分を語ることでできる場があることで、自己理解や将来の適性進路についてまた友人関係等整理することが出来、生徒のこころの安らぎエネルギーを補給する場となっている。

6. 今後の課題と対応

・授業では、ユニバーサル化を意識して取り組めたが、内容や場面、発達年齢において工夫をする必要がある。

・年間通じて対話型学習を実施し、支援が必要な生徒が安心して授業に臨める方法を模索してきた。今後も継続して各教科に落とし込んでいきたい。

・「放課後学び教室」での学びと教科担任との連携が不十分な面があった。しかし「通級による指導」に到るまでの指導としては有効であった。今後どう継続していくかが課題である。

・個別支援にSCや支援員、担任、部長等連携して取り組んできたが、時間がかかりすぎ長時間勤務が解消できなかった。

・個別の支援が必要な生徒が、合理的配慮の提供を拒み、大学受験時も大学側と連携をしようとしたが、本人が拒否したことで、一般受験となった。大変苦勞をしていることがわかっているにもかかわらず、進まなかった。

・「気づきサロン」は効果的であったが、SCとは違った切り口での支援を今後どのように継続していくのか大きな課題である。

7. 指定校について

(中学校の場合)

指定校名：京都光華中学校											
	第1学年				第2学年				第3学年		
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数			
通常の学級	43	2	43	2	46	2					
特別支援学級	0		0		0						
通級による指導 (対象者数)	(2)		(4)		(5)						
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育 支援員	スクールカウンセラー	その他	計
教職員数	1	1	11	1	6		2	1	1		24

(高等学校の場合)

指定校名：京都光華高等学校										
学級数及び児童生徒数										
課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	
全日制	普通科	178	6	179	5	202	6			
	××科									
定時制	△△科									
教職員数										
校長(副)	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	施設職員	対面職員	その他	計
2	2	33	1	14	1	4	2	1	1	61

8. 問い合わせ先

組織名：

- (1) 担当部署 学校法人光華女子学園 京都光華中学高等学校事務室
- (2) 所在地 京都市右京区西京極野田町 39
- (3) 電話番号 075-325-5223
- (4) FAX 番号 075-311-6103
- (5) メールアドレス rh092@mail,koka.ac.jp